

●厚生労働大臣賞入選

CD-ROM教材「プレゼンテーション入門」

神奈川県 産業人材課 吉田 玉緒

1. はじめに

企業は利潤追求のために製品を開発するが、その製品の良さを顧客に理解してもらえなければ、購入してもらえない。従来は、設計製造部門が製品を開発し、営業部門が売り込むなどの分業体制が敷かれていた。しかし、現在では、人件費削減、効果効率の面から設計製造部門自らが売り込みのためのプレゼンテーションも行うようになってきている。

企業によっては、日常業務のなかで社員に研修として論文の執筆や発表を課すなど、このような状況を社員のスキルアップに積極的に活用しているところも多い。「自分は技術者だから人前で話すのは苦手だ」などとは言っていない時代なのである。

一般に「ものづくり」系の訓練コースでは、制作物の形状、動き方、仕上げ具合等を見れば制作者のスキルの高さが判断できることが多い。実物を見れば説明など聞かなくても判断できてしまうことから、従来、この分野ではプレゼンテーションの重要性が認識されにくかった。しかし、今日ではプレゼンテーションの重要性は広く認識されている。

筆者は平成8年度から13年度まで神奈川県立産業技術短期大学校情報技術科に勤務していた。プレゼンテーションの授業を8年度に試験的に10名のみの選択授業として実施し、翌9年度以降は40名全員が受講する必修授業として実施した。6年の間、授業アンケートをとり、学生たちの意見を直接聞き、教材の改良に反映させた。

2. 授業内容

情報技術科2年次前期の「プレゼンテーション」の授業は2時限（1時限は90分）×17回、計51時間である。ネットワーク接続されたパソコンを用い、課題の提出はメールによる。OSはWindows2000、プレゼンテーション用ソフトとしてMicrosoft社のPowerPointを使用している。

17回の授業の内容を表1に示す。網掛けの8時限の授業で本教材を使用している。

表1 授業内容

回数	1時限目の内容	2時限目の内容
1	技術系文章作成	PowerPoint操作
2	技術系文章作成	自己紹介プレゼン
3	技術系文章作成	PowerPoint操作
4	技術系文章作成	プレゼン練習課題
5	発表技法	発表技法
6	発表技法	発表技法
7	作業/個別指導	作業/個別指導
8	作業/個別指導	作業/個別指導
9	作業/個別指導	作業/個別指導
10	卒研テーマ発表	卒研テーマ発表
11	卒研テーマ発表	卒研テーマ発表
12	卒研テーマ発表	卒研テーマ発表
13	卒研テーマ発表	卒研テーマ発表
14	作業/個別指導	作業/個別指導
15	作業/個別指導	作業/個別指導
16	再発表	再発表
17	再発表	再発表

1 回から 6 回までの前半部分で技術系文章作成と PowerPoint によるプレゼンテーション作成、発表技法について学ぶ。2 年次後期に卒業研究があるので、本授業の 7 回までに研究テーマを決めるように 4 月当初に学生に指示してある。授業の後半では、各自の研究テーマ発表を行い、その様子をビデオに録画する。発表は互いに見学し、改善点を学生同士で話し合う。授業の流れを図 1 に示す。

10 回以降の授業は若干変則的に実施しているので、その点について以下に述べる。

この授業は金曜日の 1 時限目（8 時 50 分～10 時 20 分）と 2 時限目（10 時 30 分～12 時）をあてている。しかし、40 名の発表を 1 人ずつ行うのは大変な作業である。本授業でも表 1 に示すように 10 回から 13 回までの計 12 時間（8 時限）で発表を行っており、1 ヶ月にわたって発表を行っているようになっている。金曜日の 3 時限目と 4 時限目も筆者の授業（「記号論理学」「知識処理」）なので、実際には適宜授業時間

を入れ替え、卒業研究のテーマ発表は 1 時限から 4 時限までを 2 週連続で行っている。

発表では、40 人を 10 人ずつの 4 グループに分け、半日単位で行う。10 人が大教室で発表を行っている間、残りの 30 人はパソコン室で作業を行うが、興味のある発表の場合は、大教室で発表を聞いてもよい。したがって、発表者は 9 人以上の学生と筆者他の指導員を聴衆として発表を行うこととなる。発表の後、普通は質疑応答だが、ここでは改善点の指摘をする。例えば、何枚目のスライドがわかりにくいから、このように修正して説明もこうしたらよいと思う、ということを互いに指摘しあう。聴衆の学生は発表者ごとに必ず 1 件以上の指摘を行う。

発表の様子はビデオに録画する。表 1 の 14～15 回の授業で作業/個別指導の際、または授業時間外等に筆者と発表者の学生とでビデオを視聴する。自分の発表の様子を初めて第三者的に目の当たりにした学生は、ほとんどの場合、自分で自分の欠点に気づく。しかし、思い込みが強く、自分の欠点に気づかない学生の場合には、より効果的な発表になるように考えさせ、欠点に気づくよう誘導する。

欠点に気づいた後は、できるだけ改善すべく再発表に臨む。再発表は会場を 2 箇所を設定し、同時に発表を行うことで所要時間を半分にしている。

産業技術短期大学校の通常の授業では、18 回目に試験を行っている。プレゼンテーションの授業では、成績評価を試験で行うのではなく、再発表に至る授業中の様子や改善状況を点数化し、再発表終了後間もなく（通常は翌日）本人に通知する。この成績評価には筆者の主観が多分に含まれるので、点数に不満な学生は試験期間中に筆者のところへ交渉に来るように指示している。今まで、点数の根拠や改善課題等に関して詳しい説明を求めた学生は多数いるが、点数そのものに不満を持った学生はいなかった。

3. 教材の概要

本教材のオープニング画面を図 2 に示す。オープニング画面はそのまま目次となっている。本紙は白黒印刷なのでわかりにくい、画面上に「初めて読

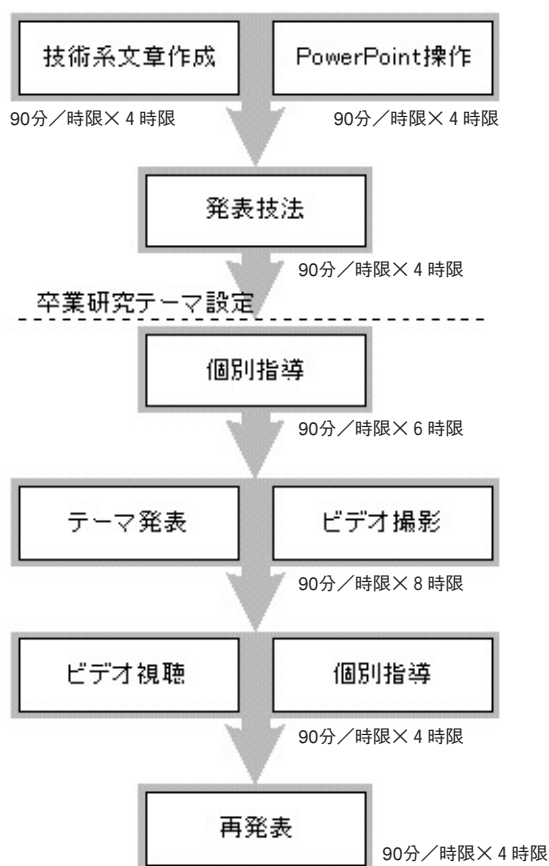


図 1 授業の流れ



図2 オープニング画面

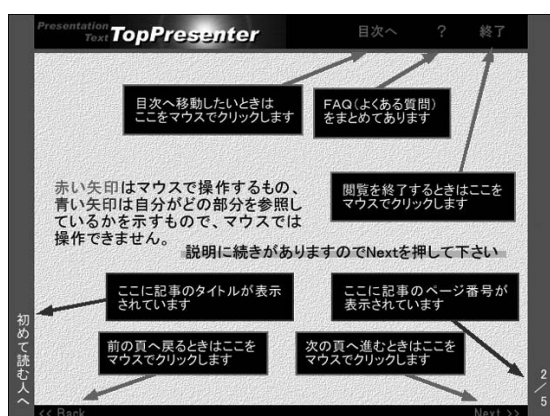


図3 初めて読む人へ

む人へ」とあり、ここをマウスでクリックすると図3に示すような一連の操作説明となる。

操作性を上げるために、操作のほとんどはマウスで行うようにした。

オープニング画面最初の「授業を始めるにあたって」では、授業の目的やプレゼンテーションの必要性、今後の授業の進め方等について説明している。プレゼンテーションに関して最初から苦手意識を持っている学生が多いので、アナウンサーのように流暢に話す必要はないこと、技術的な内容を正確にわかりやすく説明することが大切であることを明確に認識させる。プレゼンテーションで発表を行うというと、一部の隙もない流暢で完璧な発表を行わなければならないかのようなイメージを持ってしまう学生がいる。そうではなくて、どもっても、つまかえてもよいから、研究成果のような一般には難しい内容を正確にわかりやすく伝えることが大切だということ、努力すればある程度のレベルまでは誰でも到

達できる、ということをしちゃんと理解させることから始める。

表1で1～4回の授業で行う技術系文章作成に該当する内容は、教材の「文章編」としてあげた以下の項目である。

- ・わかりにくい文章ってどんなもの？
- ・正確な文を書く!! じゃあ、正確って？
- ・演習は続くよ、どこまでも
- ・わかりやすい文章を書くテクニック
- ・さらに細かいテクニック

学生が教材に対してできるだけ親近感を持って貰えるように、項目の名称を話し言葉に近いものにした。また、登場人物に男女2人の学生役を設定して、発表の苦手な学生の気持ちを代弁しながら授業を進めるように教材を作成した。なお、教材に用いた画像は筆者が自分で撮影したもの、著作権フリーの素材集から採用したものである。



図4 親しみやすい学生役

4. 教材「文章編」の内容

教材では、最初に「わかりにくい文章」の例を示し、その特徴を理解することで、わかりにくい文章を書かないようにすることを目指している。わかりにくい文章の例とは図5、図6のようなものである。

図6に示すように、学生たちに比較的なじみがある道交法の条文を例に取り上げた。法文は法律の文章としては正しく書かれているが、日常の文章や技術的な文章としては理解しにくいものがある。

年々ワープロ・コンピュータの普及で毛筆はかけないという方が多いとき、希少価値で実用にも趣味にも習いたい方も増しております。毛筆の基礎を身につけ実用にも趣味にも毛筆の利と情操面に一人でも多く勉強していただきたい。

図5 わかりにくい文章例（毛筆教室）

車両は、法令の規定若しくは警察官の命令により、又は危険を防止するため、停止し、若しくは停止しようとして徐行している車両等、又はこれらに続いて停止し、若しくは徐行している車両等に追いついたときは、その前方にある車両等の側方を通過して当該車両等の前方に割り込み、又はその前方を横切ってはならない。

図6 わかりにくい文章例（道交法）

わかりにくい文章を書かないためのテクニックが、すなわち、わかりやすい文章を書くためのテクニックである。演習を繰り返しながら、そのテクニックを身に付けていく。演習をスムーズに行うためにテキストフィールドを設けて教材に直接、演習の作文を入力するようにした。授業を始めた当初は、パソコンの日本語入力に頼らず、自分の手で字を書くことを大切にしようと考えていた。しかし、限られた授業時間の中で40人の学生を相手に行う一斉授業は容易ではない。そこで、宿題についてはノートに手で書くこととし、授業では教材に作文を入力することにした。教材のテキストフィールドに入力した作文の文章は、その後の確認画面に再表示することで自分の文章でありながら客観的に眺めることができるという利点もある。

このほかに、道案内文の演習がある。これは、(1)最寄り駅から自宅までの道案内文を書く、(2)道案内文を指定された学生同士メールで交換する、(3)受け取った相手の道案内文をもとに地図を描く、(4)道案内文を交換した学生同士で、地図を交換する、(5)相手が描いた地図を参考に自分の道案内文を修正する、といった段階を踏んで、自分の作成した文章が他人から見るとどう読めるのかを客観的に評価するもの

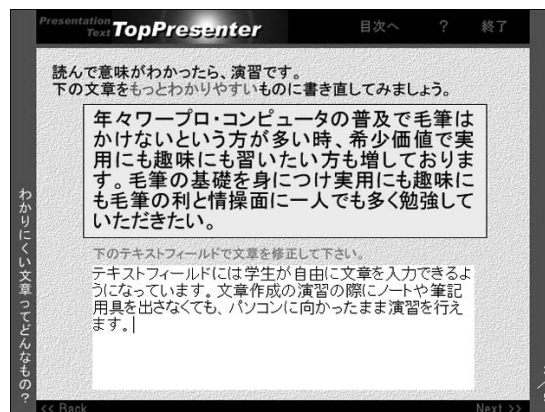


図7 教材に作文を入力する

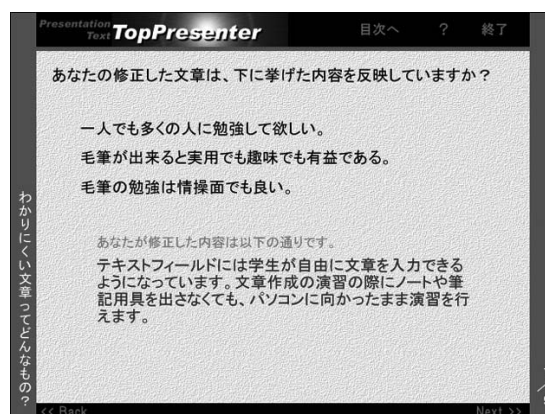


図8 入力した文章を教材の他の画面で表示する

である。就職すると顧客に電話で最寄り駅から会社への道順を説明しなければならないことがある。言葉だけできちんと説明しなければならないこともあること、普段から準備をしておけば、いざというときに慌てないですむことなど就職後の心構えとともに、図解の重要性を認識させる。

複数の段階を踏む演習を一斉に行うためには、説明もスムーズにしたい。教材のこの部分の説明は、地図をマウスでクリックするとAcrobat Readerと連動してPDFファイルを自動的に開くようにしてある。

5. 教材「発表編」の内容

表1で5～6回の授業で行う発表技法に該当する内容は、教材の「発表編」としてあげた下の項目である。

- ・発表がうまくなるためには？



図9 Acrobat Readerと連動

- ・効果的なスライドを作成する
- ・原稿作成からリハーサルまで
- ・発表を振り返って

ここで、大切なのは流暢に話すことではないことを再度確認しておく。本授業が想定しているのは、アナウンサーによるニュース報道やセールスマンによる商品説明ではない。本授業では、技術的な内容の発表として研究発表を想定している。これは、2年次後期の卒業研究を視野に入れているためである。

したがって、卒業研究発表としては、研究背景、研究目的、先行研究の状況、自分が構築したシステムまたは自分が明らかにしたこと、その評価、考察、今後の課題といった順になることを前提として、そのテーマ発表のスライドを準備する。

学生たちの多くは、最初、論理的な筋書きを構築することができずに、いくつかの項目を並べただけのスライドを作成し、隙間をクリップアートで埋めて「できた、完成だ」と思ってしまう。雰囲気をもし出すためのクリップアートではなく、システムの構成や処理対象の図表を用いて、技術的な内容を伝える発表にしたい。その違いを明らかにするために、以前の学生が作成した実物のスライドを例に用いている。その際に、教材からマウスクリックのみで自動的にPowerPointを起動するように連動させている。

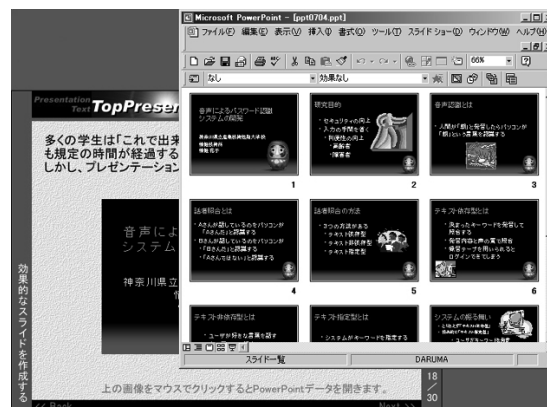


図10 悪いスライドの例

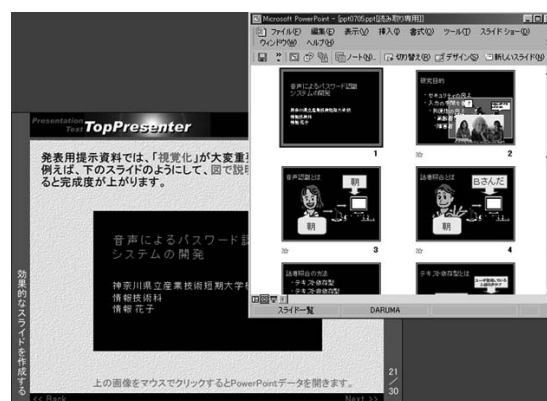


図11 良いスライドの例

6. スムーズに学習を進めるための工夫

先に述べたように、スムーズに学習を進められるように作文の演習をテキストフィールドに直接入力する、PowerPointやAcrobat Readerと連動させて具体例を表示する、等の工夫をしている。ほかには、次に述べるような工夫をしている。

教材は640×480ピクセルの画面にしているので、その範囲内に記述できるものは限られている。そこで、図12、図13に示すように説明用の文章や図解をマウスの動作に応じて現れるポップアップにして、より多くの情報を表示できるようにした。

また、図14に示すように同音異義語などチェックボタンによる小テストを設定した。

以前の学生が発表した様子を録画したビデオの良い例と悪い例とをビデオクリップに保存している。

発表を行う前にこれらのビデオクリップを見るこ

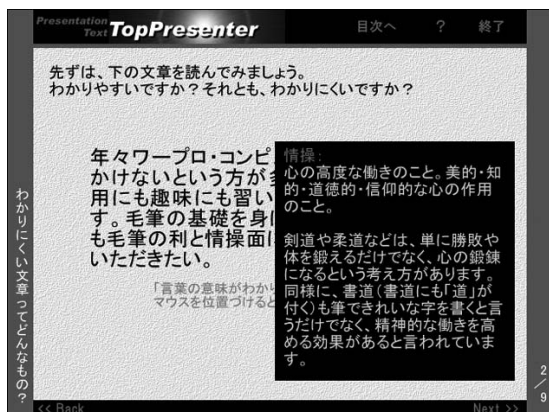


図12 ポップアップする説明文

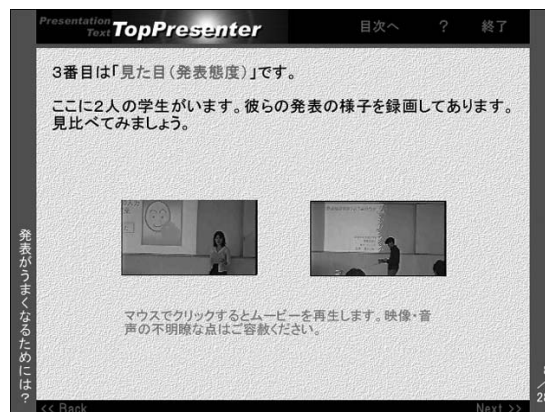


図15 ビデオクリップ

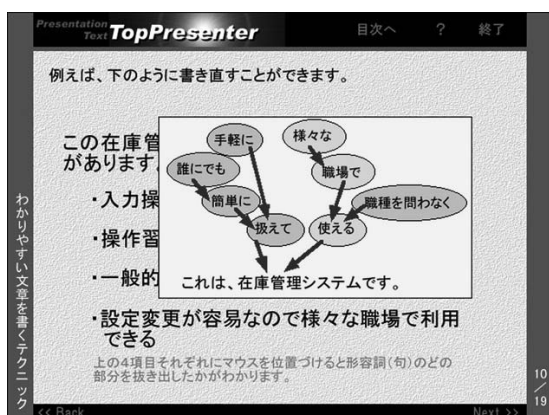


図13 ポップアップする説明図

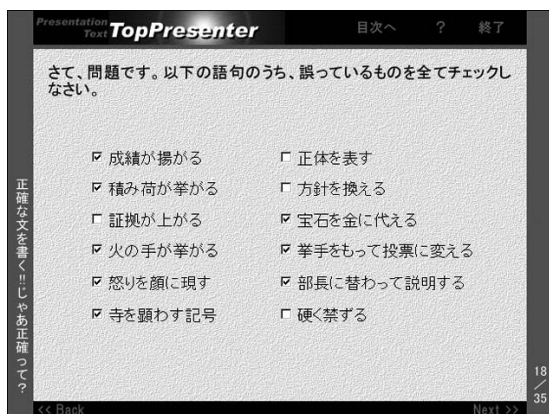


図14 小テスト

7. おわりに

技術的な内容を大勢に向かって説明するのは、だれにとっても難しい。しかし、この技術を身に付けることで、後の卒業研究発表や就職後の社内外でのプレゼンテーションに役だつ、ということを学生たちがきちんと理解すれば人前に立つことを嫌がることはない。

実際に、最初は緊張のあまり声が裏返り、手や膝が小刻みに震える学生がたまにいる。しかし、からかう者がいないのはもちろんのこと、極度に緊張していた学生も2回目には、口では「緊張したあ」と言うものの、明らかに落ち着いて発表を行えるようになっている。

本教材にはさまざまな工夫を盛り込んでみたが、しかし、内容の面で不十分な点も多く、今後も常に改善を心掛けていくつもりである。

本教材の容量は約70MBです。興味のある方は所属のメールアドレス等ご連絡いただければ、分割送付致します。今後の参考にしたいので、ご意見ご感想などお寄せいただければと思います。

【謝辞】

本教材の作成を含めて日常の業務についてご指導・ご意見をいただいた産業技術短期大学の指導部長はじめ専任講師の皆さま、忌憚のない意見を聞かせてくれた学生諸君に深く感謝致します。

とにより、学生の頭の中に良い発表のイメージを形成することができ、指示棒の使い方や間の取り方について事前に考える必要性に気づく。良い例、悪い例に採用された学生たちは苦笑いであったが、後輩の勉強に役だつならと快く協力してくれた。